

# 学生の対人関係

奥 山 道 枝

## 1. はじめに

私は授業中、或る特定の要注意学生を除いた大多数の者は、勉強に熱心で真面目な態度と、その研究心は、私の科の誇りとすべきものであると、或る程度の信頼を置き得ると、考えていた。

処が「やかましい先生だ。」「融通の利かない先生だ。」「何処となく冷たく感じられ話したくとも、どうも話しにくい先生だ。」「やれ挨拶だ、やれ礼儀だという先生だ。」等々担任の私をこのように見ている学生の居る事が、感ぜられた。

私は以上の様に受け止められる事は「無理はない。」と肯定はするが、私の学生の見方は前述の如く学生の表面からのみ判断し評価的に価値的に考えていたのであった。

実は私の持っている考え方や、社会的経験の背景に立っての主観的評価であったとも云えよう。

私は以上の学生の言葉の総合から考え合わせて学生達の知覚世界を理解し得なかった事を深く反省する訳である。

この様に考えて来ると私共の周囲には夫々異った知覚の世界が存在していると理解されるのである。両親や教官が「この学生はこういう学生だ。」と評する知覚の世界（学籍簿、成績表、人物評価などに行動の記録として記載される行動評価などはこれに属すといえよう）がある一方、「お母さんは好きだ。」「嫌いだ。」「先生は良い先生だ。」「虫の好かない先生だ。」という一見単純でもあるような、いわば精神生理的な知覚の世界が別に存在している。学生たちは後者の見方において存在する父や母、先生や友人達と現実に生活交渉し行動をしているのである。

これが学生の持っている現実の世界であると言う風に考えて行きたい。この学生の持っている現実の世界を如何にして理解するか、解明するためにどうすれば良いかと世界の学者は日夜苦心を重ねている処である。ロールシャッハ・テストにしろ、T. A. T. や C. A. T. などのプロジェクト、メソッドによる研究法も多かれ少なかれこの立場に立ってメスが加えられているといえよう。

私はT. P. T. (竹内式パーソナリティ・テスト)により今迄の表面的、部分的な観察にたよる事を捨ててT. P. T. の示す処によって人格像を考え、そしてこの人格像から如何なる行動が必然的に生じているか、又生ずべきかを推定し、然る後に平常の観察行動状況と併せ考え、指導すべきは指導し、教官との対話不足を補い、親和感を深めつつ、よき保育者を世に

送り出したいものであると考えた訳である。

## 2. 手続と方法

### ① T. P. T. の構成

T. P. T. は次のような成り立ちから出来ている。

#### I 家庭空間

- ①対人関係（子供が家族を如何に見ているか、子供の知覚世界にある人間関係）
  - ①過去空間
  - ②現在空間
  - ③未来空間
- ②対物関係（衣食住その他物質的なものについての知覚世界の在り方）
  - ①対物的欲求不満の有無
  - ②物の扱い方について
- ③対思想関係（所謂思想的傾向というものではなく、自由感とか無力感などを指している）
  - ①雰囲気について（空間圧力の問題）
  - ②自我深層部
  - ③浅層部（表層部と同じ）
- ④逃避空間（逃避欲求）

#### II 学校空間

- ①対人関係
  - ①教官との関係
  - ②学友との関係
- ②劣等感について
- ③対思想関係
  - ①雰囲気について（空間圧力の問題）
  - ②自我深層部
  - ③浅層部（表層部）
- ④逃避空間

#### III 社会空間

- ①対人関係
  - ①社会の友人との関係
  - ②社会の大人との関係
- ②劣等感について
- ③対思想関係
  - ①雰囲気について（空間圧力の問題）
  - ②自我深層部
  - ③浅層部（表層部）
- ④逃避空間

以上の構成になっているが、今回は、II学校空間に於ける対人関係の力学関係をテストし、整理したものである。

## ② 調査対象と時期

- 対象は昭和48年入学生のうち53人
- 時期は学校生活に慣れた10月上旬に行った

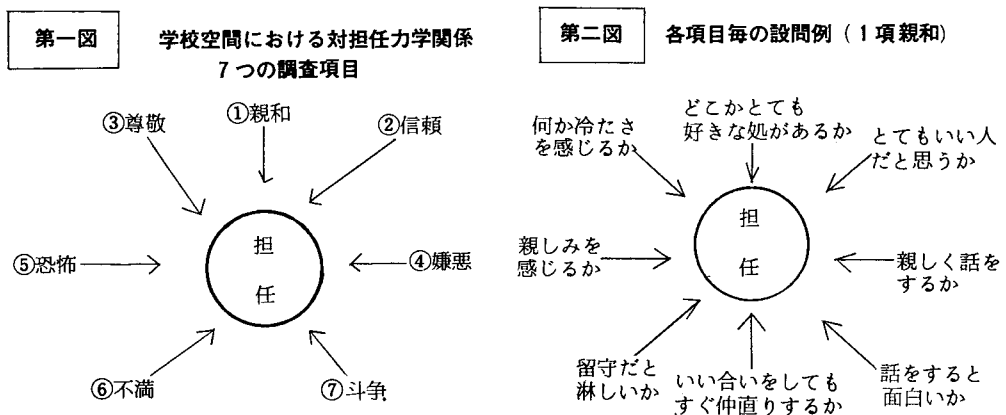
## ③ 実施上の注意

- このテストは、学術的な意味に於いて正確な資料を得るために行うものであるから卒直に、良心的に、ありのままを解答する事
- 問いに対して「はい」の時は+、「いいえ」の時は-
- どの質問にも簡単に「はい」「いいえ」と答えられるが、その一つ一つの答では、大した意味があるのではなく、全部の答をまとめ上げる時に重要な意味を持ってくるのであるから一つ一つの間にこだわって価値判断をしない方がよい。素直なそして単純な気持ちになって、ありのままを答えること。

## 3. 結果と考察

### A. 学校空間における対担任教官との力学関係

学生が対担任に対して、諸々の問題が絡んで生ずる緊張感、考え方の食い違い、世代を異にする者の経験や習慣の差異等から、学生が担任に対して親和、信頼、尊敬、等について七つの場（第一図の如き）からどの様に見ているかの力学的関係を調査するため、その各項目毎に八つの問いを設定されているのをを用いた。（第二図参照）



第二図の如く、「親和」について例をとれば「担任教官に対しどこかとても好きな処があるか。」「とてもいい人だと思うか。」との設問に対し「はい」「いいえ」の卒直素直なる解答を得て、学生が担任教官とどの程度親和しているか又親和が欠けているかを、数量的扱いによって、理解しその対策を考えようとするのであるが、同様にして友人（クラス内）の関係についても問いかけを行い、クラス運営上又は学生の指導に供するものである。

換算点数のつけ方は例えば「親和」について、8問全部○ならば、100点となり、1つでも×を答えたものは、10点引いて90点と考える、全部×の場合は20点となる。従って100点から

20点の間の配点となる。

次に、このように配点してみると(100~90)のものは非常によい関係となる、即ち親和、信頼、尊敬では、夫々非常によい関係ということになる。嫌悪、恐怖、不満では、高点程、こうした関係のない事を意味する。

(80~70)のものは「普通の関係」であるが、(70)のものでは、8問中3つが否定されているので「普通の下」の関係と見るべきであろう。(60~50)は「可成悪い関係」であり(40~20)は「非常に悪い関係」といえよう。これを調査整理すると次の第一表となる。

第一表 配点一覧

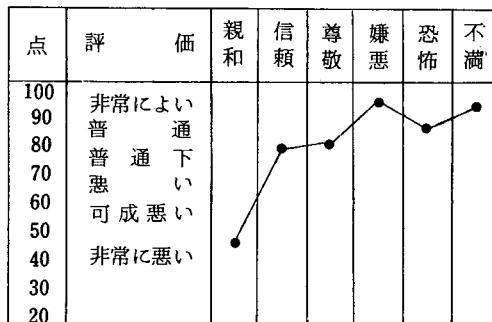
No.	親和	信頼	尊敬	嫌悪	恐怖	不満	No.	親和	信頼	尊敬	嫌悪	恐怖	不満
1	30	80	60	100	100	80	28	60	80	100	90	70	100
2	70	90	100	100	90	80	29	70	90	100	100	100	100
3	40	80	90	100	90	100	30	40	60	60	90	80	80
4	30	90	90	100	80	80	31	20	60	30	80	100	80
5	20	70	70	90	70	90	32	40	60	70	90	90	90
6	30	70	70	90	100	90	33	30	80	90	100	90	100
7	50	80	90	90	80	90	34	40	60	80	90	90	90
8	40	90	70	100	80	100	35	40	70	90	90	100	100
9	40	80	70	100	80	100	36	40	70	70	90	90	90
10	50	80	90	90	70	100	37	90	100	100	80	90	100
11	30	90	50	100	80	80	38	20	80	70	90	90	100
12	40	90	80	100	90	90	39	30	50	70	100	90	100
13	60	70	100	90	90	80	40	40	100	80	100	80	100
14	50	80	80	90	80	100	41	50	90	100	90	90	100
15	50	60	70	90	90	90	42	70	100	100	100	80	100
16	40	80	80	90	100	100	43	40	70	70	90	90	90
17	20	80	80	90	100	90	44	50	70	80	100	80	100
18	50	90	90	90	60	90	45	30	90	90	90	70	90
19	30	80	70	90	90	90	46	50	70	90	100	100	100
20	40	70	80	90	90	100	47	40	90	90	90	80	90
21	30	60	70	100	100	100	48	40	90	90	100	100	100
22	70	90	100	100	100	100	49	50	90	100	80	90	100
23	30	80	70	100	80	100	50	30	80	80	100	80	100
24	50	70	70	90	90	90	51	20	60	50	90	90	80
25	70	100	100	100	100	100	52	50	80	100	100	100	100
26	30	70	60	100	70	100	53	20	50	70	90	100	90
27	20	70	70	90	80	100	平均	42	78	80	94	87	95

第三図は第一表の点数一覧を平均し、評価を図表にしたものである。この第二表により、担任学生と担任教官との力学関係は親近性が非常に低く、信頼、尊敬及び恐怖感のない点は普通であるが、嫌悪、不満の感じは殆んど問題はない、という関係で、やや良好のようである。

担当学生の数の問題、授業時数の問題、事務量の問題等に加えて、担任者(筆者)の性格

の偏もあって、担当学生との学校空間における親和関係の非常に悪い事を自己反省をする次第である。

第三図



第二表

No.	1	5	6	21	26	27	45	51	53
親和	30	20	30	30	30	20	20	20	20
信頼	80	70	70	60	70	70	60	60	50
尊敬	60	70	70	70	60	70	30	50	70

第三表 配点一覧

No.	親和	信頼	尊敬	嫌悪	恐怖	斗争	No.	親和	信頼	尊敬	嫌悪	恐怖	斗争
1	100	70	50	70	70	60	28	90	90	40	60	90	70
2	100	70	70	90	90	80	29	80	90	70	100	90	70
3	90	70	70	100	90	80	30	100	70	70	70	90	70
4	90	100	90	100	90	60	31	90	80	50	70	80	70
5	80	70	60	60	90	70	32	70	70	70	70	90	60
6	90	100	100	70	90	90	33	100	90	100	100	90	60
7	100	100	70	70	90	70	34	80	60	60	70	80	80
8	100	80	80	90	90	80	35	100	100	70	90	90	80
9	90	100	80	90	90	70	36	40	60	70	70	100	80
10	90	60	90	100	100	60	37	100	100	100	80	90	80
11	90	70	60	70	90	60	38	50	60	70	90	80	80
12	100	90	80	100	90	60	39	50	70	50	70	80	70
13	80	60	80	50	90	70	40	100	100	70	80	90	70
14	100	90	70	90	90	80	41	90	100	50	100	90	80
15	100	80	80	100	80	70	42	100	100	70	90	80	80
16	80	90	60	90	90	80	43	100	100	70	70	90	70
17	100	70	60	80	90	70	44	90	90	50	70	90	60
18	90	100	80	70	90	80	45	100	80	60	90	70	70
19	40	70	80	80	90	50	46	90	70	90	90	80	80
20	100	100	90	90	90	80	47	100	90	60	90	90	60
21	100	90	60	80	90	60	48	90	90	60	90	90	70
22	90	100	60	70	80	70	49	80	100	40	70	90	80
23	100	80	60	90	80	60	50	90	90	90	100	80	70
24	90	100	70	80	80	70	51	100	100	60	90	90	70
25	100	100	90	90	90	80	52	100	100	70	100	90	70
26	80	60	80	90	100	70	53	100	80	80	70	80	70
27	90	90	70	90	90	80	平均	89	84	70	82	87	71

次に学生対担任教官との親近関係（親和・信頼・尊敬)のみを一瞥すると、第二表の学生については、教育的働きかけを必要とし、学生自身の抱く問題を、解決すべきであろう。

### B. 学校空間における対友人関係

学校のクラス間の友人関係は第三表の如き数字となり、それを平均し評価して見ると第四図のようになる。即ち大体普通の交友関係で余り問題のないクラスといえよう。但し尊敬する英雄的人物はなく、寧ろ友人との抗争関係や気の合わないという関係の度合いの強い学生が大分居る事が推定される、更に個人的にこの表を探ぐって見ると、No.1の学生は親しい友人はあるがクラスの中に余り信頼する友がなく、尊敬する友人関係は、最も低く、斗争心も可成持っていると推定出来る。又、No.19の学生は親しい友人関係は非常に悪く殆んど孤独であり信頼する友人もなく、それでいて斗争心は持っている。次のNo.38, No.39も同じく親和・信頼・尊敬の親近性の関係が低く、斗争心は可成持っている等、推定される。

このように同僚間の関係は親和・信頼・尊敬の念が低く、嫌悪感、斗争感を強く持っているのを概括して云えば同僚互いに分離の空間関係を形成し、孤立化傾向にあると云えよう。

保育科学生は、やがて児童の福祉の関係職に就く、多かれ少なかれその学生の人格像に欠ける部分のある事を恐れる者である。

自分の教育観を是正しつつ、この調査と平常の観察行動状況とを併せ考えつつ、担任教官の責任を果したいものである。

## 4. おわりに

今年度私に托された多人数の学生を、どの様に手掛けようかと、4月以来考えていた事から、僅かの時間を利用して調査した物を、まとめて見て私への指針とすべきものを、そのまま投稿した物で、大きな浜辺の真砂一粒に過ぎません、各位のご指導を乞います。尚ご指導ご助言をいただいた信州大学前教授竹内硬先生に、感謝いたします。

第四図 対友人関係の平均評価

